蛍の夏

　それは、ある夜の話だった。私は友人と蛍を見るために、近所の池にいた。森の中の小さな池で、そこは、私とその友人だけの秘密の場所だった。
「あ、蛍いたよ！」
「え、どこどこ？」
「ほら、あそこ。あの葉っぱのところ」
　そう言って友人は、池の向こうの黒々とした茂みの一点を指さした。なるほど確かに小さな光が見える。
「ほんとだ！　綺麗だねえ。」
　私は興奮して、ぴょこぴょことウサギのように跳び回った。友人はそんな私を見て、何が面白かったのか、くすくすと笑った。
「何だよ、笑うなよ」
「あはは、ごめん、ごめん。毎年見ているらしいのに、初めて見たみたいにはしゃぐんだもん、おかしくってさ」
　そう言って、友人はまた笑い出した。
「なっ、綺麗なもん見たら興奮するんだよ、良いだろ。蛍好きだし」
　そう言って顔を顰めると、友人はやっと笑いを引っ込めた。途端に辺りに静けさが戻ってきた。
　静か過ぎて、ここには私と友人の二人しかいないのだということを意識せざるを得なかった。
　真っ暗で足もとも見えない、そんな場所で二人、静かに夜を見つめている。あの時私は幸せだった。そして、その幸せはもう来ない。あの時の私は、それに気づかなかった。

†　†　†　†　†　†

「それからどうなったんです？　その人とは会っていないんですか？」
「ああ、友人とはそのすぐ後に離れ離れになってしまったんだ。それ以来、ね」

†　†　†　†　†　†

「君とはもう会えない」
　夕暮れに赤く染まる前で、友人は確かにそう言った。私は一瞬思考が止まって、何も返せなかった。
「……どうしてか、聞いても、いいか？」
　やっとのことで出した声は掠れていて、とても耳障りだった。
「……が終わるから」
「え？　何て？」
　友人は俯いて、ぽつりと呟いた。その声は、今にも消えてしまいそうなほどか細くて、私は訊き返した。
「今日でっ、夏が終わるからっ！」
　友人は怒ったように言った。その声は今にも泣き出しそうに震えていた。
「今日で夏が終わるって……どう、いうことだよ」
　季節なんていつ終わるか分からないものだ。私は友人が誤魔化しているんだと思った。
「はぐらかすなよ！」
「はぐらかしてなんかない。今日で夏が終わる。夏が終わればもう会えない。前々から言っていた事だよ？」
「……前から、言っていた、事？」
　理解できなかった。思い出せなかった。友人は茫然とする私の前から立ち去ろうとした。私は咄嗟に友人の腕を掴んだ。
「何？　もう行かなきゃいけないんだけど」
　友人の声が冷たく聞こえる。駄目だ、行かないでくれ。たった一言が口にできない。
　友人は、金魚みたいに口をパクパクする私の腕をほどいて立ち去

った。私は、もうどうすることも出来なくて、もう日が沈んだ池のほとりに一人、俯いて立っていた。

それ以降、私は友人と会うことは二度となかった。

† † † † † †

「それはまた……」

「意気地がないだろう？　とても好きだったのに、冷たい言葉を聞いただけで怖気づいたのさ。……ああ、そう言えば、その時はまだ、あの気持ちが恋だったとは気づいていなかったんだっけ。」

† † † † † †

あれから、私は目に見えるほどに塞ぎこんだ。親も同級生も皆心配して、声をかけてくれた。けれど、それでも私が立ち直らなかったので、声をかけてくれる人はだんだん減っていき、最後には家族と先生以外からは無視されるようになった。――その家族も先生もあまり話しかけようとはしなかったんだが。

私の心の中は、とても単純で、馬鹿らしかった。

最初は悲しんだ。友人がどこかへ行ってしまったって。

次は友人を恨んだ。どうして消えてしまったんだって。

その次は自分を責めた。友人を引き留められなかったのは何でだって。

悲しんで恨んで責めて、そしてまた悲しむ。そんな堂々巡りの日々がずっと続いた。私は、だんだんと家に引きこもるようになった。家から一歩も出ず、ひどい日には家族と一言も喋らない日すらあった。そんな私を家族は見捨てなかった。

そうして、数年が過ぎた。私は普通であれば高校へ行っている年だった。

何の気まぐれか、外に出てみようと思った。それが私を変える出来事になったのだ。ある朝の出来事だった。

私はずっと家の中にいたから、季節の移ろいを忘れていた。外に出て、やっと今が夏なのだということに気が付いた。

夜が明けたばかりでまだ気温は上がっていなくて、少し肌寒いくらいで、道には人なんてほとんどいなかった。久しぶりに外に出るコンディションとしては悪くなかった。

朝靄がかかる道を一人歩いた。特に目的地などはなかった。ただ、ずっとあの家にいるのが嫌になっただけだ。家族は何も言わず、私を受け止めてくれていたのに、私は勝手に後ろめたい気持ちになったのだ。

夏の匂いがする外を歩いていると、友人のことを思い出した。一緒に蛍を見たときの笑い声を、ふとした瞬間に見せた大人のような雰囲気を、ふっと香ってくる夏と似た匂いを、会えないと言った時の悲しそうな顔を、掴んだ腕の細かな震えを――。

私は強い目眩に襲われてその場にしゃがみこんだ。

家から出なければよかったと後悔した。

「大丈夫ですか？」

声をかけられて弱弱しく顔を上げた。そこには、声のトーンと同じく心配そうな顔をした人が、こちらをのぞき込んでいた。

私は微笑んで「ちょっと夏の暑さにやられただけです。大丈夫」と言った。しかし、その人は顔を顰めて立てるかと訊いてきた。咄嗟にはいと返せば、その人は私に肩を貸してくれて、木陰まで連れて行ってくれた。

「ありがとうございました」

戸惑いつつも助けてもらったのだからとお礼を言った。その人は頬をポリポリと掻きながらすみませんと言った。

「いきなり馴れ馴れしくして、戸惑わせてしまいましたね」

「いいえ！　その……助かりました。だから、えっと、気に病む必要は……あれ？　これだとなんか上から目線だな。えっと……」

「あはははは」
「？」
　何故かその人は笑い出した。それもかなり大きく。私は突然のことに驚いて固まってしまった。
「いやいや、ホントすみません。吃驚させてしまいましたね。　面白いなと思ったもので」
「そんなに面白かったでしょうか？」
　さっきまでの会話のどこにそんな要素があっただろうか。
「面白かったですよ。……そういえば」
　その人は唐突な人なのか、また、いきなり話題を変えた。
「はい？」
「何でこんな朝早くに出歩いていたんです？　見たところ高校生ぐらいですし、そんな年ならまだ寝ていると思うんですけど。あ、今時の高校生は違うのかな？　それとも私の学生時代がおかしかったのか？」
　質問から自問自答。口を挟む暇がなかった。なんてマイペースな人なのだろうかと思った。
「えっと、その、久しぶりに外に出ようと思って。でも人が多いのは嫌だから、それで朝に……。あと、今時の高校生がどうだかはちょっと分からない、かな」
「ああ！　それで！　『久しぶりに』ということは、ここ最近は外に出ていなかったんですね？　道理で肌が白アスパラみたいに生白いわけだ」
　何だかとんでもなく失礼なことを言われたような気がしたが、その人は悪気があって言ったようではなかった。単純に言葉を選ばない人のようだった。私はその人に好感を抱いた。
「あの、あなたはどうしてこんな朝早くに？」
　自分がされた質問は、実は気になっていたことだったので、何気なくその人に訊いてみた。その途端、その人は顔を歪ませて「墓参りです」と答えた。私は、やってしまったと思った。何と声をかければいいのか分からなかった。引きこもってから会話らしい会話をしてこなかったせいで、言葉が出てこなかった。
「そんな、悪いことを言った、みたいな顔をしないでください」
　ずっと黙っていたらその人が気遣うように笑ってくれた。気遣わせてしまった自分を情けなく思った。
「すみません。でも悲しそうな顔をされたので……。悪いことを言ってしまったんですよね。ホントにダメだな、すみません」
「えっ、私そんな顔しましたか？」
　その人は驚いたように、おどおどと言い訳をする私を見た。
「あ、はい。何というか、今にも泣き出しそうな感じの顔を」
「ホントですか？　うわ、ダメだな」
　その人は心底嫌そうに顔を顰めた。私は、またまずいことを言ったと思ったが、それ以上に、その人の反応の理由が気になってしまった。
「あの、お墓に入っている方、って言うと何か変だけど、と何かあったんですか？　すみません、こんなこと訊いてしまって」
「ああ、いえ大丈夫ですよ」
　不躾なことを言ってしまったのに、その人は怒った風でもなく、頬をかいて言った。
「どう言おうかな……墓に入っているのは私の幼馴染みで、当時幼馴染みには付き合っている人がいたのに、私がそれを知らずに告白して……。嫉妬深かった相手の人に殺されたんです。私が知っていればこんなことにはならなかったのに」
「え……」
　言葉を失った。その人は、そんな私を見て微笑んだ。
「気にしなくていいんですよ。昔のことです。それよりも、私はあなたの話を聞きたいな。あなたも辛いことがあったんでしょう？」
「どうして……」
　図星をさされて固まった私に、その人は笑って言った。
「蹲っているあなたはひどく悲しそうでしたから」

あの時の私はそんな顔をしていたのだろうか。
「そう、でしたか。でも、私の話はあなたのものほど辛くはないと思います」
そんな風にもごもごと口ごもる私にその人は言った。
「幸不幸に順列なんてつきませんよ」
心に刺さる一言だった。少し間をおいて、私はポツリポツリと話し始めた。
「友人とはその夏の夏休みに会ったんです。池のところで。初対面なのに物おじせずにあいつは話しかけてきて……。吃驚したけど、嬉しかった。一緒に蛍を見たりして。あ、あとはこんなこともありました。私が持ってきた花火で……」
私は話した。友人との思い出や別れを。
話し終わると、その人は優しく微笑んで言った。
「そうだったんですか。あなたも好きな人がいなくなったんですね」
最初、自分の耳を疑った。しかし、心にすとんと何かが落ちてきた。
そう、好きだったのだ、私は友人が。そして、会えないと言われたとき、失恋してしまったのだ。その感情を認識すると、何故か涙が溢れてきた。それは、私の心の澱みを洗い流すように、拭っても、拭っても後から後から溢れてきた。
その人は私が泣き止むまでずっと傍にいてくれた。

† † † † † †

「その人に会えて本当に良かったと思う。その人の葬式じゃあ涙も出ないくらい意気消沈したよ」
「もしかして……その人がその机にある結婚式の写真の？」
そうだと頷くと、椅子に座っていたその子は目を瞠った。
「友人さんのことは忘れられたんですか？」
私はつい笑ってしまった。まだまだ若い子だ。
「友人のことは大切な思い出。初恋の人としてずっと覚えているよ。その人だってその幼馴染みのことはずっと覚えていたと思うよ」
そう言うと、その子はそういうものなのかと首をひねりながらも納得したようだった。
「また、夏が来てるんだな」
「ああ、そうですね。今年は例年より暑くなるらしいですよ。毎年言ってますよね」
その子は窓の外を見て、うんざりしたように顔を顰めた。
「病院生活の長い私には関係がなくなってしまったな。……こんな生活も飽きてしまったよ。夏を感じたいね」
そう言うとその子は笑って言った。
「じゃあ、早く病気治して退院しましょう」
「そうだね。じゃあ、私は疲れたからもう寝るよ」
「はい、おやすみなさい」
その子は私にふわりと布団をかけてくれた。優しい子だ。
私は遠くなる意識の中で呟いた。
「なつ、……」

† † † † † †

帰り支度をしていた私は、声が聞こえたような気がして振り向いた。そこには幸せそうに微笑んでいる、可愛い寝顔のお年寄りがいるだけだ。
夏が来ます。
短くて、暑い夏が。
また、夏空の下、あなたと会いたいです。

また、お喋りしたいです。
ああ、でももうそんな時間もないのですね。
さようなら。悲しくて、愛おしい夏。